

仙林寺だより

NO. 39
編集・発行
松田正貴

行事報告

「撰心・成道会・報恩朝粥会」

お釈迦様は、人の世の苦しみという疑問を感じ、出家の道を志します。六年間の苦行を修するも疑問の解決には到らず、遂に山を降ります。性根尽き果て尼蓮禅河のほとりて身を清めていたところ、村娘スジャータから乳粥の供養を受け、体力を取り戻したと言います。体力を回復した釈尊はそれから菩提樹の木の下坐禅瞑想のご修行に入られます。その日が十二月一日、そして八日目の明けの明星が輝く頃、遂にお悟りになられたそうです。この日を祈念して一日から八日までを「撰心（集中坐禅修行）」と定め、また、八日には特に「成道会（お悟りの日）」を修行し、御跡をお慕い申し上げる法要を致します。また、最終日には撰心参加者皆で乳粥を頂き、参禅の余韻を味わう会を催しております。今年も十人のご参加を頂きました。座禅会も発足十六年を過ぎ、会員も十五名、坐禅堂は現在新規の会員を受け入れられない状態です。二十代から七十代まで幅広い年齢層の方が日々ご修行に励んで居られます。

ところで、永平寺の禅師様、今年もNHKにおいて再三お目にかかるご縁をいただきました。生き仏さま然としたお姿に向かつて手を合わせられた方が多くいらしたとか・・・この禅師曰く「学ぶとは真似る事、一日真似をすれば一日の真似、

二日ならば二日の真似、一生真似をすれば本物だ。」御年百四歳の禅師様がいまだに二十代前半の若い雲水達と日々変わらぬ坐禅修行に打ち込んでおられます。お釈迦様、道元禅師とご縁をいただきたく私達です。及ばないまでも禅師様の真似をさせて頂き、ほんの少しでもそのお心に近づきたいものです。「撰心」とは、この大いに真似ぶ学びと言えましよう。二千五百年も昔、一人の青年が三十五歳という若さで人の苦悩の元を明らかにされ、その後八十歳で亡くなるまでの四十五年間を人々の救済にその身心を捧げられたのです。同じ明けの明星を仰ぐ身に違いはありません。問題は残る一方の繕い方にあるようです。撰心の撰には養つ、収めるの意味があります。心を養う事で手こずりぎみの厄介な存在を収める箱の大きさも変わってくるようです。只、箱の大きさは流行のYシャツのように形状記憶とまではいかない様であります・・・。



成道会



朝粥会

坐禅会・読経会の「ご案内」

毎週火曜・金曜 朝六時～七時
日曜夕方四時～五時（初心者体験）

保小六年生総合学習

先月四年生の見学学習を、土曜日ごと三回ほどお受けいたしました。今月三日は六年生の訪問を受けました。「保原に生きる」という題材で、郷土の南画家熊坂適山、蘭斎の史跡を訪ねる班、また、伝統を守る意味を考える班、二班での学習です。

適山、蘭斎合作の句碑前にて説明の後、本堂に入り、適山の師田能村竹田「釈迦出山の図」、適山山水の図を鑑賞しました。伝統を守る意味を考える班には、仏教が、また禅が今に至るまでの歴史、そして開山堂の位牌に囲まれる中で、仙林寺の僧侶として私が今あるのは、歴代の住職方の「お寺を守って行かなくては」と護持する姿勢が維持されてきたからこそということまで話は及びます。

見学の最後に「今、私達子供に何か伝えたい事はありますか」の質問に、しめたとばかり命の教育、「伝統とは、建物や歴史の事だけではなく、肝心なのは遙かなる人と人との繋がりがあってはじめて成り立つわけです。皆さんの命もその通り、両親があり、祖父母があり、もつと言えば三十五億年とも言われる長い長い生命の繋がりがあつたから、私達が今こうしてここに居る事ができる。その中一人でも途切れたならば、私という存在はないのです。だから、一人一人のいのちは、重く大切なのですね」果たして思いは伝わったでしょうか。ところで「唯我独尊」という言葉も、本来この私の命の重みを言ったものです。本来からすると「唯我独尊に陥る」と言つた言い回しは間違つた用法なのです。ご参考までに・・・。

オーストラリア・マレーシア留学生が訪問

十八日、二十日それぞれオーストラリア・マレーシアよりライオンズクラブの交換留学生が訪れました。今年度住職が同クラブのガバナーをお受けしている関係で、海外からの表敬訪問も三度目、私のかなり怪しげな英語も、日本語がかなり堪能な留学生にはかえって迷惑なだけだったか？また、定例坐禅会にもポルトガル人男性一名が加入、寺子屋にもその子供さん二名が参加と、お寺も一気に国際化？したようです。

寺子屋餅つき

二十五日はクリスマス？いいえお寺の餅つきです。暖冬と思えた今年の冬ですが、やはりこの時期になりますと暦どおりの餅つき日和。毎年恒例豪華景品ビンゴ大会も、袋を開けるまで？のテンションは膨らみっぱなしの感あり、また、遠くポルトガルから？参加の子供達もすぐに打ちとけた様子で、某インスタントラーメンのコマーシャルではありませんが、ノーボーダー、子供の世界には国境など関係ないようです。最後に、今回も多くの方々にもち米の布施や、お手伝いを頂きました。併せてお礼申し上げます。有難うございました。



六年生総合学習



留学生表敬訪問



寺子屋餅つき

ちよつと一言

「災難に逢う時節には」

「子どもらと手まりつきつつこの里に遊ぶ春日はくれずともよし」

「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがる妙法にて候」

詠み人同じ言葉とは思えないと言つのが率直な感想でしょうか、実は共に江戸時代に生きた良寛和尚の残された短歌であり、手紙の一節なのです。

驚天動地、台風二十三号そして中越地震とまさに今年は大変地異、人智の及ばない自然の驚異に脅かされた一年でした。毎日のように報道される被災者の方々の様子に接する時、心から同悲の思いを禁じえません。

先の書簡も、百八十年程前、「死人けが人数知れず」と言われた越後三条大地震での安否を気使う知人とのやりとりなのですが、説明なしでは誤解を生みそうな一文です。ヒントは「かかる憂き目を見るがわびしい」の一言。災難に逢って苦しむ人々がいる中で、娑婆世界から離れた出家の身が、こうして事もなく生きながらえていることへの嘆きともとれます。危機的状況への心情の吐露、また子供達との遊戯（ゆげ）の僧、良寛を考える時「災難に逢う時節には・・・」とは、最大限のお見舞いの愛語と見るべきなのでしょう。

ところで、良寛さまを読み解くキーワードは「遊」と「任」でしょうか。「遊」「遊於娑婆世界」「観音経の一節です。阿弥陀様は極楽浄土で衆生を救い、観音様は娑婆世界に降りてきて遊戯（何ものにも捉われない自由な境地での活動）の中で

お救いになられるとあります。名主の家に生まれながらも貧困に喘ぐ農民を目の当たりに育った良寛は、何ともならない状況、また苦しい時代を背景に、目の前に現れる現実を、観音様の遊戯のなせる業（行い）と見て取らざるをえなかった、また、禅の印可を受けるほどの境涯を持った方です。そのように見ることのできる心境を得ることが真に仏に寄り添う謂わば悟りそのものだったのでしょうか。「騰々（とうとう）任天真」「任運騰騰」天や運に自然揚々（じねんようよう）と任せるべき縁の不可思議（思いはかりや表現できる範囲を超えている仏教の意味）さに落ち着く響きがあります。すでに起こってしまった災難を取り消すことは出来ない。昨日を怨んだり、明日に慄いて慌てふためいていただけでは、心の中の災難（パニック）を大きくしてしまっただけなのかもしれません。理不尽と思いつつも現実を認め、心からなる思いやりと達観した人生観からの発露、今を最大限に生きる努力の大切さを説く絶唱と言えましようか。

禅に影響を受けた心理療法として知られる森田正馬氏の「森田療法」にも「しようがないからする」という一見投げやりとも思える思考方法があります。やはりここにも「天」や「運」の存在が見え隠れしているように感じます。

病がなければ、対処の言葉が理解できないように、経験がなければ、慈愛あふれる言葉も心に響かないようです。それでも温度差を感じるとすれば、それは修行による信の違ひと言っほかはないのでしょうか。心よりお見舞い申し上げます。